ありふれた？デジモンテイマーは世界最強を越え究極へ至る―0章 テイマーズ編―

竜羽

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ありふれた少年だった南雲ハジメは小学５年生の時、友人の松田タカトがデジモンテイマーになったのをきっかけにデジモンと深く関わり、自身もデジモンテイマーとなった。

ハジメはパートナーデジモンのガブモンと共に成長していき、やがてデジタルワールドとリアルワールドを巻き込む大事件に巻き込まれていく。

これは「ありふれた?デジモンテイマーは世界最強を超え究極へ至る」の前日談。

ハジメとガブモンの始まりの物語。

目次

００話　プロローグ　運命の出会い　1
０１話　深まる絆　デジモンキャンプ　11
０２話　ブルーカードを追え　進化ガルルモン　32

００話　プロローグ　運命の出会い

南雲ハジメはどこにでもいる少年だった。
ゲーム会社を経営する父南雲　愁（しゅう）と人気少女漫画家の母南雲　菫（すみれ）との間に生まれ、サブカルチャーが他の家庭より身近にある暮らしを送りながら、普通の少し気弱な性格をした小学五年生だった。
朝起きて、学校に行き、休み時間や放課後には友人の松田啓人（タカト）、塩田　博和（ヒロカズ）、北川　健太（ケンタ）らと大好きなデジモンカードバトルに興じる。そんな日常を送り続けるはずだった。
だが、そんなハジメの日常は大きく変わる。
タカトがギルモンという本物のデジモンと出会い、デジモンテイマーになったことで――。

■■■■■

春が終わり、夏の熱気が出てくる頃。ハジメは夜道を自転車に乗りながら家路に着い

ていた。

「タカト、かっこよかったな～」

夜道を自転車で走りながらハジメは呟く。思わず漏れた独り言。そこには隠し切れない憧れが込められていた。

数日前、ハジメはヒロカズとケンタと一緒にタカトから本物のデジモンを見せてもらった。

ギルモンという、赤い体に子供とほとんど同じ大きさの恐竜のような見た目のウイルス種デジモン。

ヒロカズとケンタはギルモンの鳴き声を聞いて驚いて逃げてしまったが、ハジメは逃げずに留まった。恐怖よりも好奇心が勝ったのだった。

そしてハジメはギルモンと、本物のデジモンと出会った。

タカトが考えたオリジナルデジモンだというギルモンは、言葉を覚えたばかりの幼子のようなしゃべり方をするがとても人懐っこく、ハジメはすぐに慣れ、日が暮れるまで二人と一匹で遊び続けた。

それからタカトと少し距離ができたヒロカズとケンタの間を取り持とうとしたり、放課後はギルモンと遊んだり、タカトと同じテイマーで、テリアモンをパートナーに持つ李健良（リー　ジェンリャ）と知り合った。

そして、今日の夜。突如東京上空に出現した謎の空間にデジモンたちが吸い込まれ始める場面にタカトたちと遭遇。現場に到着すると、デジモンを吸い込むのを止め、逆に何かを吐き出した。

そこからは怒涛の展開だった。

屋上に現れた謎のデジモン。

遅れながらも到着したジェンリャとテリアモン、そして二人と同じテイマーである女の子、牧野　留姫（ルキ）とそのパートナーのレナモン。

デジモンカードをデジヴァイスにスラッシュすることで、パートナーデジモンを進化・強化させるタカト達三人のテイマー。

謎のデジモンに挑んでいくが、レナモンとテリアモンは返り討ちに遭い、残るはタカトとギルモンが進化したグラウモンだけ。

先に倒された二人の助言から一矢報いた二人だったが、正体を現したデジモン――完全体のミヒラモンに窮地に追い込まれる。

だが、諦めないグラウモンと、その思いに応えようとするタカトの心が一つになり、完全体のメガログラウモンに進化。ミヒラモンを倒した。

それを見たハジメは、近くに来ていたヒロカズとケンタ、クラスメイト達と歓声を上げたのだった。

「僕もなりたい。デジモンテイマーに……」
　さっきまでの出来事を思い出しながら自転車で家路を急ぐハジメは、何度も呟く。憧れ、自分もそうなりたいという願いを。
　もうすぐ家の近くに差し掛かったその時、住宅街の小道から光が見えた。
「何？」
　それは小さな光で、昼間なら気づかず、夜であっても見逃してしまいそうな頼りない光。だがハジメはなぜかその光が気になった。
　自転車から降り、その小道へ入り、進んでいくハジメ。
　ゴミが転がり、エアコンの室外機が並ぶその先にハジメは見つけた。
「これ……卵？　まさかデジタマ!?」
　普段食べる卵よりもずっと大きく、テレビで見たダチョウの卵よりも一回りも大きい。柄も四角や三角の模様があるそれにハジメは見覚えがあった。
　デジモンの卵、デジタマ。カードに書かれているイラストにそっくりだった。
「こんなところになんで？」
　ハジメは知らないことだが、先ほど東京上空に現れた謎の空間――リアライズしたデジモンを消し去る人口ブラックホール「シャッガイ」と、それを逆に利用して開かれたデジタルワールドへの道、デジタルゲート。それにより東京の空間が不安定になってし

まっていた。その余波でデジタルワールドからデータ容量の小さいデジタマが流れ着いてしまったのだ。

「……持って帰ろう」

少し迷ったがハジメはそのデジタマを持ち帰ることにする。

それはこんなところにデジタマを置いておいたらまずいだとか、デジタマから孵ったデジモンが暴れたら危ないという理由もあるが、一番はタカト達みたいにデジモンテイマーになれるかもしれないという願望からだった。

近くに捨てられていた段ボールを組み立て、そこに卵を入れて隠すハジメ。そのまま自転車の籠に入れ家に向かった。

ほどなくして家に着いたハジメだが、家に入ろうとした時にふと気が付いた。

(あ、このまま帰ってもいいのかな?)

デジタマを持ったまま家に入ったら当然両親に見つかる。普段は忙しく、帰るのも遅い二人だが今日は珍しく二人とも帰っているのだ。

(デジタマ見せたら流石のお父さんとお母さんでも……うーん……)

両親がこれを見たときのことを想像して不安になるハジメ。二人は職業柄デジモンのようなサブカルチャーには寛容、どころか大好きな人間だ。

でも、これが本当にデジタマなのかもわからない。それにテイマーであるタカト達は

家族にはまだデジモンのことは話していないという。
普通の家ならそうする。南雲家も普通の一般庶民だし、そうしたほうがいいのかもしれない。
結局ハジメは卵を段ボールに隠したまま帰宅。なんとか両親の目を逃れて部屋に隠すことに成功したのだった。

■■■■■

ハジメがデジタマらしき卵を家に持ち帰り、部屋の中で隠し始めて一週間がたった。その間、ハジメは学校に行くとき以外はなるべく部屋で過ごし、卵を見守り続けた。
しかし、一向に卵に変化は現れない。アニメのように卵を撫でてみるも何の反応も見せなかった。
そんなことをしている間、タカト達はギルモン達と過している。この間も地下鉄に現れた謎のデジモンを三人と三体で協力して倒したらしい。（ハジメは卵の世話をしていたため、後日学校で聞いた）
だんだん焦りを感じてきたハジメは、思い切ってタカトにテイマーになった理由を聞いてみた。

「テイマーになった理由？　いきなりどうしたの？」
「ちょっと気になって。やっぱりかっこいいから？」
「うーん、そうだなぁ。なりたくてなったわけじゃないし……」
ハジメが真剣な顔で質問するのでタカトも真剣に考える。
タカトがテイマーになった経緯は、持っていたカードの中に混ざっていたブルーカードをカードリーダーに通し、デジヴァイスに変化したのが切っ掛けだ。そのデジヴァイスにタカトが書いたギルモンの絵や設定をリードしたことでデジタマが生まれ、そこからギルモンが出てきた。いわば明確な理由があってテイマーになったわけではない。でも、
「でも、もしもテイマーになった理由があるなら……」
「あるなら？」
「ギルモンに会うためかな」
「ギルモンに？」
「うん。あの時、デジヴァイスにギルモンを書いたメモをスラッシュしたのはギルモンに会いたいと思ったからなんだ。そうしたらギルモンは本当に僕の前に現れた。だからギルモンっていう友達に会うため。これが僕がテイマーになった理由だよ」
ハジメはタカトの話を聞き、ガツンと頭を殴られたような気がした。自分はかっこい

いテイマーになりたくて、デジタマを拾い、孵るのを待っていた。
でも、それは生まれてくるデジモンのことを考えていないんじゃないか？
テイマーになるためにデジタマから生まれてくるデジモンを利用しようとしているんじゃないか？
だからデジタマのデジモンは自分の前に生まれてくるのを拒んでいるんじゃないか？
そこまで考えるとハジメは部屋に隠してあるデジタマにすごく申し訳ない気持ちになった。
タカトと別れて急いで帰宅したハジメは、急いでデジタマに向かい会う。
「ごめん。僕タカトみたいなかっこいいテイマーになるために君を利用しようとしてた。本当にごめん!!」
デジタマに向かって両手両膝を付いて頭を下げる、所謂土下座をするハジメ。両親から教わった最上級の謝罪だ。
「こんな僕だけど、今は君に会いたいと思っている。だから、もしも許してくれるなら僕に会ってほしい。そして――友達になって!!」
心の底から叫んだその時、机の上に置いてあったカードの束から光があふれ始めた。
「何これ？」

その光に気が付いたハジメが机の上を見てみると、置いてあったカードの一枚が光っていた。光っているカードはやがてその絵柄を全く違うものに変えていく。青い下地に黄色いDの文字とそこから飛び出してくるドット絵のドラゴンが描かれたそのカードをハジメは見たことがあった。

「タカトが使っていたブルーカード？　もしかして……！」

急いで自身のカードリーダーに、ブルーカードをリードするハジメ。するとカードリーダーは光に包まれ、水色のカラーリングに銀色の縁取りをしたデジヴァイスになった。

「これが僕のデジヴァイス……「ピキッ」え!?」

ハジメが自分のデジヴァイスに感動していると、今度は何かが罅割れるような音がした。

バッと振り返ると、この一週間ピクリともしなかったデジタマに罅が入り、ビクビクッと動いていた。

やがて罅は卵全体に広がり、ついにデジタマは孵った。そこには生まれたばかりのデジモンがいた。

「君は？」

ハジメが話かけるとデジモンは目を開き、ハジメに目を向けた。

赤い色の体に手足のないスライムのような体をしたそのデジモンの名は――。
「おれ、プニモン。きみはだれ？」
「ハジメ。南雲ハジメ。プニモン、君のテイマーだ」
「テイマー？」
「そう。テイマー。――友達だよ」
ハジメは右手のデジヴァイスを握りしめ、左手をプニモンに差し出した。その手にプニモンはそっと寄り添ったのだった。

こうしてハジメはデジモンテイマーになった。この後、部屋でプニモンと話しているところを両親に見つかってしまい、騒がれてしまうがすぐに受け入れられ、プニモンは南雲家の新たな一員として迎え入れられた。
そしてプニモンはすぐにツノモンという手足の無い丸いからだに鋭い角のようなデジモンへと進化するのだが、そのツノモンの額にはXの文字のような形をした青いクリスタルが付いていた。

01話　深まる絆　デジモンキャンプ

偶然、デジタマを拾った小学五年生南雲ハジメ。

そこから生まれたのは幼年期デジモンンのプニモンだった。プニモンが生まれたことに喜んでいると両親に見つかってしまい騒ぎになるが、プニモンがパートナーデジモンであることを説明すると、二人はプニモンを受け入れた。

やがて生まれた日の夕方にはプニモンは進化して、ツノモンになった。しかし、その姿はハジメの知るツノモンとは少し違っていた。

デジタマを孵した次の日、ハジメはツノモンを連れてタカト達に会いに来ていた。ツノモンは同じデジモンであるギルモン、テリアモン、そしてパートナーデジモンではないがギルモン達と仲がいいクルモンという白いデジモンと遊んでいる。

「ツノモン。幼年期。レッサー型デジモン。必殺技は酸の泡。

うん、やっぱりツノモンだと思う。姿はちょっと違うけど」

そこでタカトのデジヴァイスでツノモン?　のデータを確認してもらった。その結果、ツノモンであることはわかった。

しかし、ハジメのツノモンはデジヴァイスに表示されているツノモンと違い、額に青

いＸの形をしたクリスタルがあった。
「僕のデジヴァイスにもツノモンって出てる」
「私のもよ」
　ジェンとルキのデジヴァイスにも同様にツノモンのデータが表示されていた。
「もしかしたら亜種かもしれない」
「亜種？」
「うん」
　ふと思いついたことジェンが話す。
「生き物の中には普通の種とほとんど同じだけど少しだけ違いを持った亜種っていうのがいるんだ。体の色だったり、角の本数が違ったり。ハジメのツノモンももしかしたら、そういう亜種のデジモンなのかもしれない」
「なるほど。そうなのかもしれない」
　ハジメたちはジェンの説明に納得する。その時、ツノモンのデータを表示していた三人のデジヴァイスからピピッという電子音が鳴った。
「何？」
「プログラム解析完了？」
「Ｘ……なんて読むのこれ？」

デジヴァイスにはこう記されていた。
Ｘ―ａｎｔｉｂｏｄｙ

■■■■■

「抗体だな。Ｘ抗体」
その日、帰宅したハジメは夕食後にリビングでテレビを見ていた父である愁に、タカト達のデジヴァイスに表示された文字を見せた。すると愁はすぐに意味を教えてくれた。
「抗体？」
「抗体っていうのは、体が持っている病気と闘う力のことだ。お父さんやハジメも持っているんだ」
「なら特別に変なことじゃないんだね」
「ああ」
「よかった」
ハジメが安堵しているとテレビを見ていたツノモンが膝に飛び乗ってきた。
「ハジメ!!」

「どうしたのツノモン」
「テレビに映ってるアニメって面白いね！　ガン○ムかっこいい！　あんな風に飛んでみたい！」
「ツノモンも進化したら飛べるんじゃないかな？」
「進化？」
「うん」
　デジモンにはいくつかの成長段階があり、進化することで姿を変え、新たな能力を獲得する。
　今のツノモンは幼年期Ⅱ。ここからさらに成長期→成熟期→完全体へと進化し、最後は究極体という絶大な力を持つ存在になる。
「ツノモンが進化したらガルルモンになるよね。そしてその先はメタルガルルモンだから飛べるよ」
「メタルガルルモン？」
「うん。ちょっと待ってて」
　ハジメはツノモンを膝の上から降ろすと自室に行き、そこからいくつかのデジモンカードを持ってくる。
「まずこれがツノモンの次の進化。成長期のガブモン」

ハジメが取り出したカードには二足歩行の青い毛皮を羽織ったデジモンが描かれていた。頭には一本の角がある。

「そしてガブモンが進化したのがこのガルルモン。そして完全体のワーガルルモンに、究極体のメタルガルルモン」

さらに取り出した三枚のカード。

四足歩行の青い狼のガルルモン。

ガルルモンが二足歩行になった人狼の姿をしたワーガルルモン。

そして、全身を機械化したサイボーグになったメタルガルルモンのカード。

「メタルガルルモンになれば空を飛べるよ」

「これが俺！　すごい！　進化するの楽しみ!!」

ハジメの言葉に喜ぶツノモン。二人はそのまま一緒にテレビを見ながら、早く進化したいという話しをするのだった。

■■■■■

ツノモンが生まれてから一か月程経った。

その間、ハジメとツノモンは平和な日常を過ごしていた。ハジメが学校に行っている

間、ツノモンは家に大量にある漫画やアニメＤＶＤを見たり、愁や菫の職場で遊んだり、ギルモンやテリアモン、クルモンと遊んだりして過ごし、ハジメが学校から帰れば一緒に遊んだり、ハジメの宿題について一緒に考えたりと充実した生活をしていた。

だがその一方でタカト達は再び謎のデジモン、サンティラモンと地下鉄で戦った。その時はツノモンが幼年期ということで戦いには赴かず、ハジメはタカト達の勝利を待っていた。

タカト達にまかせっきりにするのは悪いとは思ったが、ゲームならともかく現実での争いごとが苦手なハジメは少しほっとしていた。

それから数日後、学校のサマーキャンプの日がやってきた。

近くの山にあるキャンプ場にハジメ達の学校の五年生全員で向かい、一泊二日のキャンプをする行事だ。

タカト達はデジモン達が置いてきぼりになることと、最近戦い続きになっていたことを憂い、気分転換をさせるためにデジモン達もつれていくことにした。当然、ハジメもツノモンを連れていくことにした。

ツノモンやテリアモンは体が小さいため、ぬいぐるみやバッグのふりをさせれば連れていくことができた。だが体の大きなギルモンは引率の先生たちに見つかってしまう。

そこでタカトとハジメ達はクラスメイト達に協力を求めた。タカトが担任の浅沼先

生の気を引いているうちにクラスメイト達の体で隠したギルモンをバスに乗せることに成功。そのままキャンプ場へ出発した。

バスの中では浅沼先生が寝ているのをいいことに、ギルモンも交えたカラオケ大会を開いたり、ツノモンがその可愛さから女子生徒たちに可愛がられたりと賑やかな道中となった。

キャンプ場に着いたハジメ達はすぐにテントを張り終えると、ヒロカズとケンタに断りを入れて山の奥へ向かった。

先生たちの目がないことを確認すると大きなシートを広げ、ハジメが持ってきた重箱の弁当を広げる。

「うわぁ、すごいお弁当」

「うん。大きさもそうだけど中身も豪華だね」

「おいしそー！」

「早く食べよう！」

タカトとジェンが驚き、ギルモンとテリアモンが早く食べようとする。

「うちの家族にはデジモンのことばれているからね。頼んでみたらデジモンたちの分も用意してくれたんだ」

「菫のご飯おいしいよ！」

「じゃあ、お言葉に甘えて」
「「「「「いただきまーす」」」」」
ハジメ達は菫の用意した弁当を堪能した。味もそうだが、大自然の中でみんなと食べるその時間は掛け替えのない思い出の一つとなったのだった。

弁当を食べ終えた後、ヒロカズとケンタ、他のクラスメイト達も加わり、先生たちに隠れながら山での遊びを堪能した。普段、あまり外で遊ぶことをしないハジメもツノモンと山を駆け回った。
やがて日も落ち、夕飯になってキャンプファイヤーを囲みながら自炊したカレーを食べたり、タカト達とは別のクラスの担任の森先生の怖い話に震えたりした。
夜中、みんなが寝静まった頃にヒロカズとケンタに頼み、ハジメとタカトとジェンはデジモン達を連れてテントを抜け出した。
綺麗な夜景が見えるというスポットに向かうためだ。
デジモンたちは夜の山道を楽しそうに駆けていく。ツノモンはギルモンの頭の上に乗っている。
その様子をハジメ達は微笑ましそうに見つめている。
「テリアモン達嬉しそうだね」

「連れてきてよかったよ。特にギルモンは、普段は人目につかないようにしているし」
「ツノモンも幼年期だからあまり自由にさせたら危ないんだよね」
そして、夜景の見える崖にやってきた。
三匹と、いつの間にか現れたクルモンはその光景に目を奪われる。その様子を見て連れてきてよかったと思うハジメ達だが、突然デジヴァイスが鳴り始める。
「まさかデジモン!?」
思わずつぶやいたジェン。デジヴァイスを見てみると確かにデジモンの反応を示す赤い反応があった。だがその反応は今まで見てきた反応よりも、
「反応が小さい」
「どうする？　ツノモン達を呼んでくる？」
ハジメの言葉にジェンは少し考えこむとデジモン達の方を見る。まだデジモンがいることに気が付いていないようで、夜景を見ている。
「僕とタカトで確認しに行こう。ハジメはデジモン達をお願い。僕達が戻ってくるまでごまかしておいて」
「わかった。気を付けて」
「うん。行こうタカト」
「うん」

ジェンとタカトがデジモンの反応のある森の中に入っていくのを見ながら、ハジメはデジモン達を引き続き見守り続けた。

幸いタカトとジェンが戻ってくるまでデジモン達は二人の不在に気が付くことはなかった。

戻ってきた二人によると反応のあったデジモンはとても小さく、暴れる様子はなかったらしい。

とはいえ、デジモンのことに気が付くとまた戦いになり、せっかくのキャンプが台無しになってしまう。そのため三人はデジモン達を連れ急いでキャンプ場に戻ったのだった。

その夜、東京では大規模な停電が起こっていたことをハジメ達は知る由もなかった。

■■■■■

翌朝、朝食を食べた後ハジメ達は川で遊んでいた。

ここでもハジメ達はデジモン達を遊ばせるために上流にある人気のない沢を見つけ、そこで遊んでいた。

ツノモンは手足がないため泳ぐギルモンの背中に乗っている。

「ギルモン泳ぐのうまいね」
「でしょでしょ。もっとはやくなるよ」
「わー!!」
「僕も乗るー!」
「クルモンも乗るクルー!」
「わぁ――!? おもいよ――!!」
ギルモンの上にテリアモンとクルモンまで乗っかる。すると一気に重くなったため、ギルモンはひっくり返ってしまった。
「何やってんだよ」
「あはは。でも楽しそうだ」
「ツノモンって水の上浮かべるんだ」
それを見てタカト達は微笑む。ハジメはツノモンが水の上に浮くという事実にちょっと驚いていた。
それから何故かギルモン達によく絡んでくる野良デジモンのインプモンが現れ、水遊びに混ざり始めたりしたが、賑やかに時間は過ぎていく。
だがその時間は、突如として破られた。
「ギエエエエエエエッ!!」

響き渡る金切り声。ハジメ達が声のする方を振り返ると、木の枝の上に一体のデジモンがいた。

その姿は金色の鶏。背中には二股の金具のようなものを背負っている。

「昨日のデジモンだ！」

「昨日より体が大きくなっている」

「ギエエエエエエエアアアアアアアアッ!!」

タカトとジェンが困惑していると、そのデジモンは背負った金具のようなものから電撃を放出し始める。

それは真っ直ぐにギルモン達へ放たれる。

「「うわあああああっっ!!??」」

「ギルモン!?」「ツノモン!?」

「昨日の今日でこんなに大きくなるなんてっ」

ジェンはデジヴァイスを取り出し、デジモンのデータを見ようとするが表示されない。

「データが出ないってことはミヒラモンやサンティラモンと同じ」

「デーヴァとか言ってたよね」

「あれがデーヴァ」

先日地下鉄に現れたサンティラモン。消滅する間際、タカト達に自らを『デーヴァ』の一体だと名乗ったのだ。

現れた二体のデーヴァはデジヴァイスにデータが最初は表示されなかったため、目の前のデジモンも『デーヴァ』であるとジェンは考えた。

「同じデーヴァだとしたら完全体かもしれない」

「成長期のギルモン達じゃ勝てない」

「ツノモンは幼年期だから……まずいっ！」

ハジメは幼年期で防御力が低いツノモンが危ないと思い、駆け寄ろうとする。そこにデジモンから再び電撃が放たれる。

「ギエエエエェェェアアアアアアァァァッ!!」

「ハジメ危ない!?」

「ハジメッ！」

タカトとジェンの静止の声もハジメには届かない。ただツノモンを助けたいという一心で、ハジメは駆ける。その姿を見たツノモンが叫ぶ。

「ハジメッッ!!」

「クルゥゥゥゥッッ!!!?」

その時、まるでハジメの危機に呼応するようにハジメのデジヴァイスとクルモンの額

の赤い三角模様が輝いた。
――ＸＥＶＯＬＵＴＩＯＮ――
「ツノモン！　Ｘ進化！」
ツノモンの体が光に包まれる。その光の中で体がデータに分解され、再構築されていく。
手足のない体から、長い爪が生えた立派な手足のある体に。
刃のようだった角は鋭く伸びる一本角に。
体の上に青い獣型デジモンの毛皮を被り、さらにその一部を取り込みレッサー型から獣型へと変わる。
「ガブモンＸ!!」
光の中からツノモンから進化したガブモンが飛び出し、ハジメに当たりそうになっていた電撃へ自ら飛び込む。
電撃は直撃するが、とっさに盾にした自らの毛皮がダメージを軽減する。
「ツノモン？　進化したの？　ガブモン??」
「フンッ!!　……うん、進化したみたいだ。ハジメ」
両腕を振り回し、電撃を弾き飛ばすガブモン。その姿は確かにガブモンだ。だがツノモンと同じく、お腹の模様や、目つき。毛皮に覆われていない右手など所々違っていた。

「よくもハジメを攻撃したな!! 《プチファイヤーフック》！」
ガブモンはハジメを攻撃された怒りを露わに、まるで獣のようにデジモンへ俊敏に飛び掛かる。
固く握りしめた右腕を振りかぶると、そこに青い炎が迸る。そのまま右腕をデジモンの胴体へ叩きつけた。
その攻撃を大したことはないと思っていたデジモンはまともに受けるが、
「ギエエエエエエエッ!!??」
成長期とは思えないその威力に悲鳴を上げながら枝から叩き落された。
「すごい」
「あ、データが出た。シンドゥーラモン。完全体。聖鳥型デジモン。やっぱり完全体だ」
ジェンがデジモン――シンドゥーラモンのデータを確認している間に、枝から叩き落されたシンドゥーラモンは翼を羽ばたかせて飛び立つと、何処かへ飛んでいく。
「待てっ！」
それをガブモンは唸り声を上げながら追いかけていく。
「ギルモンも行く！」
「僕も！」
それにギルモンとテリアモンも続いていく。

「僕たちも行こう」
「「うん」」
ジェンの言葉に、ハジメとタカトも同意する。
三人は急いでテントまで戻ると、水着から着替える。その時、ヒロカズとケンタから麓の町で昨晩停電が起こったことを聞く。
シンドゥーラモンの体が大きくなったことと電撃を放ったこと。それに停電のことを聞いたジェンの頭の中で三つのことが繋がった。
つまり、シンドゥーラモンは電気を吸収することで体を大きくさせることができるのではないか？
そして、シンドゥーラモンは更なる力を求めて飛び立ったのではないか？
その推測から導き出されるシンドゥーラモンの行先は、この山にあるダム。水力発電所だ。

■■■■■

バスに乗ってダムに向かったハジメ達三人はそこで発電所の電気を吸収するシンドゥーラモンと、そこに攻撃を加えるガブモン達を見つける。

「《ファイヤーボール》！」
「《プチツイスター》！」
ギルモンの火球とテリアモンの小型竜巻が放たれるが、シンドゥーラモンは動じない。
「《プチファイヤーフック》！」
ガブモンのプチファイヤーフックも繰り出されるが、電気を吸収してパワーアップしたシンドゥーラモンにはもう効いていない。
「何とかしないと。今なら……」
ハジメはポケットから持ってきていたデジモンカードを取り出す。
戦うのは怖いが、もうガブモンは戦い始めているし、タカト達もギルモン達を助けようとしている。なら四の五の言っている場合じゃない。
「僕もテイマーなんだ！」
取り出したカードの中から一枚のカードを手に取る。それをデジヴァイスの側面にあるカードリーダーに通す。
これこそデジモンと共に戦うテイマーの戦い方。
「カードスラッシュ！」
パートナーデジモンへカードの力を与える唯一無二の方法。

「高速プラグインＨハイパーアクセル！」
　ハジメがスラッシュしたカードの情報がガブモンへ送られる。その情報はガブモンのスピードを強化させる。
「走り回ってやつをかく乱するんだ！　顔を狙って！」
「わかった！《プチファイヤー》!!」
　ハジメの指示に従ってガブモンは口から青い炎を吐きながら、シンドゥーラモンの周りを走り回る。
　そのスピードと顔に当たる炎に、シンドゥーラモンの注意がガブモンだけに向く。
「今だよ、タカト、ジェン！」
「うん」
「ありがとう」
　ハジメとガブモンが気を引いている隙に、タカトとジェンもカードを取り出す。
「カードスラッシュ！　超進化プラグインＳ!!」
　それは進化を起こすカード。その力を受けたギルモンとテリアモンは進化する。
　――ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ――
「ギルモン進化！」
「テリアモン進化！」

ギルモンとテリアモンのデータが分解され、再構成されていく。
より大きく、強靭な体へ。
強力な武器を手に入れて、その姿を現す。
「グラウモン!!」
「ガルゴモン!!」
ギルモンは見上げるほどの巨体を持つ真紅の魔竜型デジモン、グラウモンへ。
テリアモンは両手にバルカン砲を持つ獣人型デジモン、ガルゴモンへ。
二体の成熟期デジモンがシンドゥーラモンへ挑む。
「グラウモン!」
「《エキゾーストフレイム》!」
「ギェイッ!?」
グラウモンの口から放たれたのは、ギルモンの頃とは比較にならない火炎。それはシンドゥーラモンの態勢を崩す。
その隙を優れたハンターであるガルゴモンは見逃さない。
強く高く飛び上がると、シンドゥーラモンの顔に向かって右手のガトリングアームで突き上げる。
「《ダムダムアッパー》!」

「ギエエエエエエエッ!!?」
打ち所が悪かったのかふら付いたシンドゥーラモンは、グラウモン目がけて落下する。
グラウモンは右肘にあるブレイドにプラズマを発生させ、シンドゥーラモンに叩きつける。
「《プラズマブレイド》！」
シンドゥーラモンは吹き飛ばされ、ダムの湖に落下する。
「ギェイッギェエエエエッッ!!??」
「あいつ自分の電気で苦しんでいる」
「漏電しているってこと?」
そのまま苦しんだシンドゥーラモンは、爆発して消えていった。
「勝ったの?」
「勝ったよ。ハジメ」
シンドゥーラモンが消えるのを見届けたハジメが呆然と呟くと、そばに来ていたガブモンが答える。
それを聞いてハジメは全身の力を抜いて座り込む。初めてのデジモンバトルに知らないうちに体に力が入っていたようだ。

そして、今日新たな姿を手に入れたパートナーにねぎらいの言葉を送る。

「改めてこれからよろしく。ガブモン」

「こちらこそ。ハジメ」

余談だが、この後進化して大きくなってしまったグラウモンとガルゴモンが帰りのバスに乗れなくなり、結局夜にハジメの父の愁に迎えに来てもらうこととなった。

０２話　ブルーカードを追え　進化ガルルモン

デジモン達と共に小学校のサマーキャンプに参加したハジメ達は、キャンプ場の山の中で謎のデジモン集団デーヴァの一体、シンドゥーラモンと遭遇。

その戦いの最中、ハジメのパートナーデジモンのツノモンはハジメの危機に進化。ガブモンとなりギルモン達と協力しシンドゥーラモンを倒したのだった。

「かっこよくなったわね！　ツノモンちゃん、いやガブモンちゃん！」

「おいおい、菫。こんなかっこいいのに『ちゃん』はないだろ『ちゃん』は！　なあ、ガブモン君！」

「は、恥ずかしいです……」

「ああ!!　毛皮を引っ張って恥ずかしがるその姿いいです！　ありがとうございます！

ありがとうございます！」

褒めたたえながらカメラのシャッターを切るハジメの両親に、恥ずかしがるガブモン。でも自分のことを褒められているのでうれしさを隠しきれていない。

そんなパートナーと両親を苦笑しながら見るハジメだが、その手に持ったガブモンのカードを見る。ほとんど同じ姿だが、自分のガブモンは少し違う。

一番の違いは普通のガブモンは爬虫類型デジモンだが、ハジメのガブモンは獣型デジモンだ。

やはりジェンの言った通り、ガブモンの亜種なのだろう。だが、

「今度は右手を振り上げたポーズを取ってくれないかな。今度のゲームの資料にしたいんだ！」

「こ、こうかな？」

「凛々しいわ。じゃあ次は必殺技見せて！　確かプチファイヤーだったわよね！」

「わーわー！　火事になるからやめて落ち着いて!?」

慌てて止めに入るハジメ。興奮しすぎていた両親はごめんごめんと謝り、ガブモンは吐こうとしていた炎を止める。

亜種だろうが関係ない。この楽しい家族や友人との日常が続ければ、それでいいとハジメは心から思った。

■■■■■

進化したことで両腕が使えるようになったガブモンは、時間があれば本やインターネットで知識を集めたり、ゲームや漫画を楽しむようになった。

南雲家には両親の仕事柄、多種多様な蔵書に様々なジャンルのゲームや漫画・ライトノベルがある。

ガブモンはそれを楽しみ、ハジメも宿題が終わればそれに加わり、さらに仕事から帰ってきた両親も加わった。

そうして、ガブモンはすっかりオタク一家南雲家に染まっていったのだった。

時は進み七月。ハジメ達の小学校も夏休みに入った。

そんなある日、ハジメ、タカト、ルキの四人はジェンに呼び出された。

なんと彼がトレードで偶然手に入れたカードがブルーカードに変わったというのだ。

タカトとハジメのカードリーダーをデジヴァイスへ変化させ二人がデジモンテイマーになる切っ掛けとなり、グラウモンを完全体のメガログラウモンに進化させた不思議なカード。その正体を突き止めたいと思ったジェンはハジメ達に協力を求めた。

そしてハジメ達四人はカードのトレード相手を探し、カードの入手元を探した。その結果、一人の少年が秋葉原で手に入れたことを突き止めた。

だが、そこで四人は奇妙なことを聞く。

少年はブルーカードに変わったカードはもともと持っていたカードではなく、黄色い服を着た人物とぶつかった際に紛れ込んでいたカードだというのだ。

その黄色い服を着た人物こそが、ブルーカードに深いかかわりを持つ人物であると

思ったハジメ達は翌日秋葉原に向かった。
「え？　ハジメそれってツノモン!?」
タカトは秋葉原に向かう集合場所の駅の前で、やってきたハジメが抱えているものを見て驚く。
なんとハジメの腕の中には先日ガブモンに進化したはずのツノモンがいたのだ。
「昨日、連れて行かなかったから拗ねちゃって。それでテリアモンくらいの大きさなら連れていけるって言ったら、ツノモンに戻ってみたいって言ったんだ。そしたら本当にツノモンになっちゃったんだよ」
「そんなことってあるの？」
「レナモンはやったことないわよ？」
「僕もだよ」
タカトの疑問にルキが答え、テリアモンも自分はやったことないという。
しばらく考えていたジェンが推論を話す。
「必要があると思ったから身に着けたのかな。イルカやクジラはもともと海の生き物じゃなかったけど海の中で暮らすために進化した。ガブモンもハジメについていくために体を小さくする必要があった。だから体の小さなツノモンになった。
レナモンやテリアモンはそもそも体を小さくしなくても困らないから、じゃないか

な」
「でもそれならギルモンも幼年期になれないかな？　そうしたら連れてこられるし」
　タカトは昨日も今日もギルモンを連れてきていない。ギルモンの大きさは人間の子供と同じくらいなので電車に乗せたら大騒ぎになるからだ。
「うーん、どうだろう。ギルモンって幼年期の姿になったことないんじゃない？　ツノモンは一か月くらい幼年期だったから、あっさり退化出来たんだと思う」
　ジェンの言葉にそれもそっかと思うタカト。でも、いつかギルモンも電車に乗せてあげたいと思うのだった。
　その後、電車で秋葉原に向かった四人は黄色い服を着た人とぶつかったというデジモンカードダスの前で張り込みをする。
「本格的に探偵ものみたいだね」
「探偵といえば昨日見たコ○ンの映画面白かったね。仮想世界で探偵になりたいよ」
「デジモン探偵ツノモンってこと？」
「ガブモンのほうが探偵っぽいと思うよ」
　ハジメとツノモンがそんなやり取りをしていると、突然周囲のデジタル機械がおかしな動作をし始めた。
「これはッ!?」

「ジェン、来るよ」
ツノモンとテリアモンが何かの気配に気が付き、周囲を警戒する。
ルキの隣にもレナモンが現れる。
三体のデジモンが警戒する中、秋葉原の町中に突然霧が発生した。デジモンがリアルワールドに出現する際に起こる現象、デジタルフィールドだ。
一瞬にして真っ白になった視界の中、タカトはゴーグルを、ジェンとルキはサングラスをかけて何が現れるのか見極めようとする。
やがて、霧の中からデジモンが姿を現した。
「メエェェ――ン！」
まるで白い羊の姿をした人馬のような姿をしたデジモン。車を踏みつぶしながら道路を駆ける。しかもその強烈な鳴き声に周囲の人々は突然眠ってしまう。
さらにそれだけで終わらなかった。なんと霧の中からはもう一匹のデジモンが姿を現した。
「フンッ！」
今度は黒い牛の姿を人馬のような姿のデジモン。先に現れた羊のようなデジモンとは逆の方向に駆ける、
「ここから」

「ここまで」
　やがて二体は道路の端から端まで辿り着くと止まり、デジタルフィールドもその範囲まで広がる。
　そして二体は街を破壊し始めた。破壊した場所からデジタル機器やＣＤ、ＤＶＤなどを食べ始めた。
　それを見て人々は我先にと逃げ始める。
「何しているのあれ？」
「デジタル部品を食べている？」
「リアルワールドに現れたばかりで体が安定していないのかも」
「だからデジタルなものを食べているってこと？」
　ジェンの推測をハジメが引き継ぐ。もしもそうなら完全に安定する前に倒したほうがいい。
「僕とテリアモンがあいつを。ルキはあっちを頼む」
「わかったわ」
　ジェンとテリアモンは羊のような姿のデジモンに。ルキは牛のような姿のデジモンに向かう。
　ハジメはデジヴァイスで二体のデータを確認しようとするが、表示されない。

「データが出ないってことはあの二体もデーヴァ!?」
「ハジメ。俺たちはどうする?」
「……様子を見よう。今はツノモンなんだし」
ハジメはツノモンを強く抱きかかえると、何が起こってもいいように注意を払う。
テリアモンとレナモンは二体に攻撃を加える。が、二体はダメージを受けた様子はなく、平然としている。
そのまま二体は食事を止め、テリアモン達に向き合う。
「お前たちか。人間に媚を売るデジモンとは」
「ほう」
羊のような姿をしたデジモンはテリアモンを見て蔑むように言い放ち、牛のような姿のデジモンはレナモンを見て感嘆したような声を上げる。
「データが出た。
あっちはパジラモン。聖獣型デジモン。完全体。
こっちはヴァジラモン。聖獣型デジモン。完全体。
やっぱりこいつらもデーヴァだ!」
ハジメが二人にそういうとテリアモン達も気合を入れる。
「我らのデータを見たのか、⊠ッ!」

ヴァジラモンはハジメの方を向くと、その腕に抱かれているツノモンを見て眉をしかめる。
「なんだ。あ奴は」
そういうとヴァジラモンは相対していたレナモンを無視してハジメの方に向かってくる。
「え？　ちょっと何!?」
「レナモン！」
「《狐葉楔》！」
「フン！」
ハジメが狼狽えているとルキの指示を聞いたレナモンが必殺技を放つ。しかし、成長期のレナモンの技ではヴァジラモンを止めることはできず、放たれた木の葉はヴァジラモンの手に持った剣で払われてしまう。
そして、ハジメの目の前にヴァジラモンが来た。
「ハジメに近づくな！」
「ツノモン!?」
ツノモンはハジメを守ろうと腕の中から飛び出す。
するとツノモンの体は光に包まれる。

「ツノモンX進化！
——ガブモンX！」
ツノモンはガブモンへと進化し、ハジメを守るようにヴァジラモンの前に立ちはだかる。
「貴様、なんだ？」
ガブモンを見て、ヴァジラモンは嫌悪感を催す。
「何？」
「なんなのだ。貴様のその薄汚いデータは!!!」
「え？」
ガブモンがその言葉にあっけにとられていると、ヴァジラモンは両手に剣を握り、それを振り下ろしてきた。
ガブモンはそれをまともに受けそうになるが、間一髪レナモンがガブモンを抱え上げて助ける。
「大丈夫かガブモン」
「うん。ありがとうレナモン」
「いい。それより今は戦いに集中しろ」
「ああっ！」

二体はヴァジラモンに向き合う。
ヴァジラモンも両手に剣を構えると、二体に斬りかかる。
「ふん！」
「くぅっ!?」
いや、正確にはヴァジラモンはガブモンへ攻撃を繰り出した。それを慌てて避けるガブモンだが、ヴァジラモンは攻撃の手を緩めない。
次々に繰り出される斬撃にガブモンはひたすら躱していくが、次第に追い詰められていく。
「一体何なんだ!?」
「貴様のデータは汚れている。実に不快だ。ロードもせずデータの塵にしてくれる！」
ヴァジラモンの言葉にガブモンは次第に怒りを募らせていく。
「（俺のデータが汚れている？　不愉快だと？）勝手なことを言うなあ!!　《プチファイアー》！」
「効かん！」
怒りを込めて炎を放つがヴァジラモンは微動だにしない。
「どうしたらいいんだ。このままだとガブモンが」
ガブモンのピンチに狼狽えるハジメ。

なぜヴァジラモンはガブモンを執拗に狙うのか？
汚れたデータって何のこと？
どのカードを使えばいいんだ？
そもそもなんで戦わなくちゃいけないんだ!?
いろいろなことが頭の中を駆け巡り、どうすればいいのかわからなくなる。
「しっかりしなさい！」
「っ、ルキ？」
「テイマーが狼狽えてどうするの！　しっかり自分のデジモンを見て、力を与える。それがデジモンテイマーよ！」
厳しく叱咤するその言葉に、ハジメはハッとする。そして、ハジメは一度深呼吸すると、改めてヴァジラモンと戦うガブモンを見る。
必死に剣を躱すガブモン。時たま反撃するが成長期の攻撃では歯が立たない。おそらく、強化のカードで攻撃力を上げても倒すことはできないだろう。
だったら、
「だったら、進化するしかない！」
その時、その戦いを偶然近くで見ていたクルモンの額の赤いマークが光始める。
「カードスラッシュ！　超進化プラグインS！」

ハジメがスラッシュしたカード。それは今までタカト達も使っていた進化のカード。その力がガブモンに宿る。
「この力は……ハジメ！」
「ガブモン！　僕は信じている。君のことを。こんなところで死んじゃだめだ。一緒に生きるために、進化するんだ!!」
――ＸＥＶＯＬＵＴＩＯＮ――
「ガブモン！　Ｘ進化!!」
ガブモンのデータが分解され、新たに再構成されていく。
被っていた青い毛皮は全身に広がり、一体化する。
四肢は伸び、力強く大地を駆ける四足歩行になる。
両肩からは鋭い金属のブレードが伸びていく。
これこそがハジメのガブモンが進化した成熟期。
知性が高く、主人と認めたテイマーのために忠実に戦う孤高の獣型デジモン。その名は、
「ガルルモンＸ!!　ウオオオオオッッ!!」
進化したガルルモンはヴァジラモンに飛び掛かる。
「ぬぅ、速い!?」

ガルルモンのスピードに面食らったヴァジラモンは紙一重で避けるが、その時ガルルモンの型のブレードが掠る。
それはガブモンやレナモンの攻撃にビクともしなかったヴァジラモンの体に一筋の傷をつけた。
「なんだと!?」
「まだまだぁ!!」
獣の俊敏性を生かし、ガルルモンは何度もヴァジラモンに飛び掛かる。そのスピードは成熟期とは思えないほどで、完全体のヴァジラモンを翻弄する。
そして、ついにヴァジラモンを完全に捉えた。
「カードスラッシュ！　サーベルレオモン」
「《ネイルクラッシャー》!!」
そこにすかさずハジメがカードスラッシュでガルルモンを援護する。
究極体のサーベルレオモンの力が宿った爪の一撃がヴァジラモンに当たる。
「舐めるな!」
しかしヴァジラモンも負けてはいない。とっさに二本の剣を交差させて、ガルルモンの一撃を受け止める。
たたらを踏み、数歩下がるが態勢を崩すことなく受けきる。

だが、そんなことはガルルモンもハジメもわかっていた。
「「カードスラッシュ！　強化プラグインW」」
「《フォックスファイアー》!!」
「《狐葉楔》！」
ハジメとルキが攻撃力を上げるカードをスラッシュし、それを受けたガルルモンとレナモンが必殺技を放つ。
青い炎と鋭利な木葉の乱舞にヴァジラモンは吹き飛ばされる。
「ぬおおおおっっ!!?」
「ヴァ、ヴァジラモン!?」
吹き飛ばされた先には、ボロボロになったパジラモンがいた。
パジラモンもテリアモンとジェンと戦っていたのだが、ガルルモンと同じようにテリアモンが完全体のラピッドモンに進化したことで追い詰められた。
ジェンとタカトを人質にしようとしたのだが、そこにヴァジラモンは吹き飛ばされてきたのだ。
「《ゴールデントライアングル》!!」
そこにラピッドモンの必殺技が炸裂。緑色の光線が二体に直撃し、パジラモンは断末魔の悲鳴を上げ消えていき、ヴァジラモンも姿を消した。

「終わった……」
　ハジメは息を吐き、その場に座り込む。
「お疲れ、ハジメ」
　そんなハジメにガルルモンが近づき、労いの言葉をかける。
「……ガルルモン、だよね？」
「うん。そうだけど」
　集まってきたタカト達もガルルモンを見る。
「ガルルモン。成熟期。獣型デジモン。
　ガルルモンだけど、姿が私たちの知っているのと違う」
「デジヴァイスの表示も違う。ツノモンと同じで、やっぱり亜種のデジモンなのかな」
　ルキとジェンがデジヴァイスでデータを確認する。タカトも興味深げにガルルモンを見る。
「亜種だろうと、関係ないよ」
「ハジメ？」
「ガルルモンはガルルモン。僕のガルルモンだ。それでいいよ」
　そういうとハジメはガルルモンの顎の下を撫でる。それをガルルモンは嬉しそうに受け入れるのだった。

（貴様のデータは汚れている！）
（どういう意味なんだ？）
しかし、ガルルモンはヴァジュラモンの言葉が頭の中で引っかかっていたのだった。

■■■■■

秋葉原のデジタルフィールドが消滅した後、ハジメ達は急いでその場を離れた。
ガルルモンはすぐに退化し、ツノモンとなってハジメの腕の中で眠っている。今は帰りの電車に揺られている。
「ハジメちょっといい？」
「何ルキ？」
突然ルキに話しかけられるハジメ。
「ハジメってさ、戦うの嫌い？」
「え？」
「なんとなくだけど、今日の戦いのときの反応が、初めて会った時のタカトみたいだったからさ。もしかしてって思って」
「……うん。戦いっていうか、誰かと争うのが苦手かな。ゲームとかなら大丈夫なんだ

けど」
ルキの問いに、眠っているツノモンを撫でながらハジメは答える。
タカトのようなテイマーになりたいと憧れていたハジメだが、その理由が好きなデジモンと触れ合いたいというもので、戦いを好む性格ではない。
だからシンドゥーラモンとの闘いも、今日のヴァジラモンとの闘いもあまり乗り気ではなく、常にパートナーのガブモンの身を案じて行動していた。
今日ガルルモンを進化させたのも、ヴァジュラモンを倒すというより、倒されないようにするために進化のカードを使ったのだ。
「私も、戦いが楽しいなんて今は思ってないし、積極的に戦いたいと思わないわ。
でもね、それでも戦わなきゃいけない時がくる。その時は覚悟したほうがいいわ」
「覚悟って、戦う覚悟？」
「戦うときに迷わない覚悟よ。戦うにしても、戦わないにしても迷っちゃだめ。一度決めたなら貫きなさい。少なくとも、今日みたいに戦いが始まっているのに狼狽えてパートナーだけ先に戦わせるのはやめたほうがいいわ。戦うならパートナーと一緒に戦いなさい」
「……うん。わかった。ありがとうルキ」
ハジメがお礼を言うとルキは照れくさそうに顔を背けた。

ハジメが戦う覚悟を決めるときは、もうすぐ訪れることとなる。

■■■■■

異空間に存在する電脳空間。そこで一体の聖騎士型デジモンと堕天使型デジモンが対峙していた。

「あきらめろ。もう逃げ場はないぞ、メフィスモン」

「私が何をしたと？　なぜ追い掛け回す、オメガモン」

二体は言葉を交わし、やがて激突する。ハジメ達が知らないところで次の戦いはすでに始まっていた。

夏が深まり、テイマーズの冒険が始まる。